

いように感じます。もともと循環器向きの性格だったのか、循環器内科を続けていた結果、雰囲気似て来たのかは不明ですが、各専門領域ごとにキャラクター的な特徴があるようです。

いい思い出に米国留学もはずせません。当時の三内科教授、柊山幸志郎先生の絶大なるお力添えで、UC San Diego Printz Labに研究留学することができました。家族4人は雲ひとつ無い青空のサンディゴで3年間過ごし、共通の思い出が作れ、家族の絆が深まりました。

帰国後は大浜第一病院に勤務医として長くお世話になり、故大浜方栄先生を始め関係の方々に感謝しています。医療と経営の両面で勉強する事が多く、開業後とても役に立っています。救急外来であっという間に急変する患者、因縁をつけて病院に怒鳴り込んで来る当たり屋、経営者にとってつらい2月の事など、多くの経験を積むことができました。

開業後は妻と一緒に働き、毎日平穏無事な日々が続いています。定年退職後に粗大ゴミ扱われる事は回避できそうな雰囲気、つくづく医師をやってきて良かったと思います。

「忙裡閑を偷む」

沖縄協同病院 内科・血液浄化療法科部長

金城 紀代彦

光陰矢のごとし。卒後25年、早いものです。卒後、すぐに大学院に進学し、そのまま基礎医学の研究者として過ごし、アメリカ留学の後、臨床どっぷりの今現在、沖縄協同病院の血液浄化療法部にいます。はじめは、一般の定期透析を手伝うことから始まりましたが、今の病院が急性期病院と慢性期（定期透析と回復期リハビリ）に分離する際に急性期病院へ移動し、今は急性期の血液浄化に特化して専念しています。急性期の血液浄化ですので、急性期疾患を有する透析患者の定期透析だけではなく、非透析患者でも特に敗血症や多臓器不全で血液浄化療法を施す患者も少なくありません。ICU・HCUと透析室、そして内科病棟、時に外来までを一日中往復する状況が続いています。このような汲々忙々の中、如何にして自己を精進するかが自分の重要な課題だと考えています。

『格物致知』ということわざがあります。「事物の道理を極め、学問・知識を高めること」との意味です。今も年に最低2回は全国規模の学会での発表を目標にしていますが、実行はなかなか大変

です。忙しい時には『日々是好日』と思うことで乗り切ったときもありましたが、すぐに限界となり、時として『無為自然』が良いかと減退気味になったり、未だに志操堅固と遙か離れたところで浮遊している有様です。しかし、そのような中、急性期血液浄化学会での最初の発表でいきなり座長推薦を頂き、その発表を論文にできたことは、今の自分の方向付けを固める良い機会になりました。自分がやっていることは、たいしたものではないにせよ、自分の臨床での問題点を抽出し、整理し、解決（治療）への糸口を見つけないと、思いが一つの形になったわけで、少しは実際の臨床現場に還元できかなと嬉しく思っています。論文作成は知的道楽とも言われることもありますが、これがあるから日常の臨床が楽しくなるのも事実です。『忙裡閑を偷む』で、時間を練りだしながら、今後も格物致知していきたいと考えています。

「3つの良かった」と 臨床医に求められるもの」

はらクリニック 院長

原 信一郎

以前お世話をした「患者」から、突然手紙が届いた。「先生に出会い、カウンセリングがなかったら今の私はなかった。あの頃はとても辛く、とても大変でした。しかし、病気になって沢山のことに気づき、気づかされました。今が、一番生きやすいです。今がとても楽しいです」。

この手紙には、「症状がとれて、良かった」、「病気が治って、良かった」、そして「病気をして、良かった」という“3つの良かった”が示されていると思う。「病気をして、良かった」とは、奇異に聞こえるかもしれないが、どのような病気であれ、自分の病気に積極的に取り組み、とことん良くなれた患者は、そのような心理的な境地に立てるようだ。

ストレス社会と言われる現代社会は、“からだ”と“こころ”の病気をたくさん生みだしている。われわれは、気象の変動、大気汚染、病原微生物などの身体的なストレスに加えて、国内外から判断に困るような多様な情報、職場・学校・家庭における人間関係の不和・軋みなどの心理社会的なストレスに曝された生活をしている。このようなストレスに対して適切に受けとめ、効果的な対処ができなければストレスが関与する病気になってしまうようだ。本来われわれに備わっている自律神経系・内分泌系・免疫系の働きが損なわれて、健康を維持することができなくなって